

使命



—僕らの夏が始まろうとしている。夏は、青春だ。

そんなテレビCMを横目で見ながら、机に向かう。学校の宿題が終わらないのだ。とりあえず、僕の夏は、青春にはならなそうだと一人でため息をつく。

ビーコン

「お前も、ゲーセン来いよ!まだ俺ら中!だぜ?」

LINEで誘われることほど、厄介なことはない。断るのもめんどくさいし、といつもと同じように誘われるがままだにゲーセンへ行く。にしても、今時ゲーセン以外にも行くところあんだろ、と心の中で悪態をつつきながら。



「行ってきまーす!」

「ねえねえ、平八君の話聞いた?」

「ううん。」

対して興味もないが相手は話したいようだから、つづける。

「平八君がどうしたの?」

「お父さんが海に出たそうよ。やはりお国のために働く人は尊敬できるわね!私は、将来看護婦になってたくさんの人を助けたい!」

「そっか。平八君のお父さんも海に。」

そっけない返事になってしまったことに気付き、慌てて微笑みを浮かべる。

キーンコーンカーンコーン

にしても何なのだこの授業は、まるで睡眠薬のようじゃないか!世の中の不眠症のひとは全員この人の授業を受けたほうがいい。それが何よりも薬だ。そんな働かない頭でぼんやりと自分は将来何になりたいのか考える。将来なりたいものなんて特になし、主婦にでもなるのかなあ。



さわさわと吹く風がほほをなでる。

ゲーセンにつかれた僕は初めて、この「黄金山」にきた。山というには小さく、丘なのではないかという場所ではあるが、寝そべると意外と気持ちいい。

「ふー。」

目を閉じるとこんなに自然豊かで平和な場所があったのかと思うほど、静かで、静かで、いい匂いがした。暖かくて、でも風が涼しくて、ほっとするような場所だった。

それから疲れた時はいつも黄金山にくるようになった。人はほとんどおらず、僕にとって世間と離れてリラックスできる唯一の場所となった。



あまりいいところではないな。山というより丘じゃないかと思いつつ、地面に座る。先生が、「もしもの時があったときの避難場所だ。この山の近くにいたら、ここに逃げるんだぞ。」
とってわざわざ連れてきてくれた。

この山からは街全体を見おろすことができる。とてもたくさんの人が働いているのが見える。やっぱりこの街にはたくさんの方がいるんだと改めて感じる。栄えている都市であるから当たり前であるが。

この街の姿を見ることができこの山が気に入った。そのあと、何にもすることがないときにはよく来るようになった。



ん？

今日は珍しく、人がいる。話すのは面倒くさいから、少し離れたところに座って寝そべる。

眼だけを動かしてその人のことを見る。その人はとてもつまらなそうな眼をしている小学生くらいの女子だった。

目が合った。慌てて目をそらすか、相手はじっと無表情で僕の顔を見つめてくる。黙っているのも気まずく、声をかける。

「ここが好きなの？」

「いいえ。」

冷たく答える少女に驚いていると、

「ただ、この街を見下ろすのが好きです。」

独り言ともとれるような声で、少女はつぶやく。その子は由貴子と名乗り、古めかしい名前でしょと自虐した。

「あなたはどのようにしてここにきているのですか？」

そういわれると、対して理由にないことに気付く。

「強いて言うなら、疲れたからかな、」

「何にですか？」

「”青春”に。」

「ふふっ。」

おどけていった僕のセリフに由貴子は初めて笑顔を見せた。まるで、僕の気持ちをすべてわかっているといわんばかりの、大人びた笑い方だった。

「じゃあ私、そろそろ帰ります。ずいぶん長くここにいたので。」

「うん。じゃあね。」

初対面でここまで話す子は珍しい。しかし、見た感じ小学校高学年くらいの少女だったし、偏見だがそのくらいの子にはフレンドリーな子が多いのかなと思う。にしては大人びていたなあ。



またいる。このところこの山にくるたびにあの男性がいる。こんな時代に暇なわけがないのに。見た感じ体は丈夫そう
うで、病気だからというわけでも、大金持ちのご子息だからというわけでもなく、「一般市民」なのに暇そうだった。

「またいたんですね。」

「まるで、いちゃダメみたいな言い方だな。」

べつにそんなことはないが。ここに来るのは個人の自由だ。国が止めない限り私が止める理由もない。

「ところで君さ、何歳なの？」

普段の私だったら、答えないほうが厄介な会話が増えると判断し、答えていただろうが、今日はそれよりもこの男性に
対する警戒心が勝り、一瞬返答に詰まる。その様子に気付いたのか、

「あ、僕は13歳。中学1年生だよ。べつに、言わなくてもいいし。」

え、いっしょだ。

「え？」

思っていたことが声に出してしまったようだ。

「君、僕と同じ年なの？」

男性が大きな声で問いかけてくる。私はその迫力と自分と男性が同じ年だということに驚いて半開きの口を閉じるこ
となくフリーズした。

わたしが、この男性と、同じ年？信じられない。だってこの人、すごく大きいし。同級生にだってこんなにガタイがいい人
はいないはずだ。

「あなた、本当に13歳ですか？」

やっとの思いで問い返す。

「うん。そうだけど。ていうか君、本当に13歳？」

「ええ。」

「同じ年だったんだね。」

「そうですね。」

「だったらさ、その敬語やめてよ。同じ年なんだし。」

「え、でも」

「だから、敬語やめてって。」

「わかった。」

そこまで押されて自分の意見を突き通そうとするほうが面倒くさいから、素直に受け入れる。

「僕の名前は陣内成。改めて、よろしく！」

「よろしく。」

「って言っても、たまたまここにきて会った同じ年ってだけだし、ただの他人だよな。」

そう言って陣内は再び寝転がり、空を見上げる。そして、目を閉じて、寝た。人の目の前で寝るなんて無防備だと思
いつつ、静かに山を去る。この人の前では、意見を合わせなくても周りに迷惑をかけることがないし、素の自分でいられ
る。また、話せるといいなと思うあたり、自分はこの男児に好感を抱いているようだ。



一週間後また黄金山へ行くと、由貴子がいた。

「やあ。」

山へ行ったら会えるというのが当たり前になり、最初のほうは話しかけるのに勇気が必要だったものの、今は何とも思わなくなってきた。

「これあげる。ここのシロツメクサで作ったの。」

そうやって由貴子は僕に冠をかぶせてきた。

「本当に器用だね。ありがとう。僕にも作り方教えて。」

「じゃあとりあえず、その辺のシロツメクサ集めてきてよ。」

「え、それは面倒くさいから、いやだ。」

「え、」

ふたりで腹を抱えて笑う。何が面白いのかは全然わからないのに、面白い。

「その面倒くさいを成くんのためにわざわざやって冠作ったんですけどお」

「ありがとうございますっ!心の底から感謝申し上げます。」

「あはは!」

由貴子はこんな笑い方をする子だったのかと驚く。こんなに楽しそうに笑うのは、出会ったころには考えられない。あのおとなびた笑い方をしていたころを思い出す。

「ん?どした?」

そうやって僕の顔を覗き込んでくる顔はまだ幼い雰囲気が残っている。思わず微笑むと、なんだそれと笑われた。

「じゃあ行くね!私、意外と忙しいから!」

「おう!行ってらっしゃい!」

心なしか最近由貴子はこの山にいる時間が短くなった気がする。まあ、中学生だし塾にでも行きだしたのかなと想像を巡らせる。僕もちゃんと勉強しないといけないのはわかっているが、何から手を付けたらいいのかがわからず、後回しにしている。とりあえず、帰って宿題でもやるかぁ!と大きく伸びをして起き上がる。

その次の日、黄金山に行っても由貴子は来なかった。また次の日も、そのまた次の日も。

毎日今日こそは会えるかもしれないと期待して足を運んでも、由貴子は来なかった。僕はいつの間にか、リラックスのためではなく、由貴子と会うために黄金山に行っていたのだと気づく。

一か月後。窓に打ち付ける、というほどではないがしとしとと朝から雨が降り続いていた。今日は黄金山に行くか迷ったが、もしかしたらと思い、傘をさして黄金山に行った。

ようやく由貴子は、黄金山に来た。傘をさしていなかったから、全身びしょぬれだった。

「お!成くんじゃん!久しぶり!」

「久しぶり!って、その前にこの傘入って!風邪ひいちゃうよ!」

「ん。ありがと。」

「どうしたの?最近忙しい?」

「当たり前じゃん。成くんだってこんなに戦況がひどくなって忙しくないわけないでしょ。」

「へ?」

「じゃあそろそろ行くね!また絶対会おうね!」

そう言って彼女は私の頬にキスをすると、恥ずかしそうに目を伏せて

「じゃあね!」

といった。雨はひどくなっていた。3m 先も見えない。

「え、ちょ雨やむのもう少し待って。」

雨音で聞こえなかったのか、由貴子は走り出した。彼女の背中はずぐ雨の中に消えた。聞きたいことがたくさんあった。キスされるなんて初めてで恥ずかしさと嬉しさといった気持ちが混ざって、頭の中でぐるぐるまわる。漫画でよくある、頭の上に?がいっぱいあるような状況だった。



しかし、その後、由貴子が来ることはなかった。毎日のように黄金山に通ったにもかかわらず、一度も、1秒も顔を見ることがなかった。だんだん僕は由貴子と会うことをあきらめるようになっていた。もちろん、由貴子とは仲良くなれたと思ったし、もっともっと会いたいと思っていた。でも、よく考えてみると僕は黄金山でしかあったことがないし由貴子に関して年齢以外は何も知らない。家も、学校も。だからもうあきらめよう。

でも、会いたい。



雨が酷かったあの日、成に会うのは最後になるかもしれないことを覚悟していた。

でも、さいご、一度だけ、会えた。会えたのに。

私は薄々気づいていた。成は私とは別の世界に生きているのだと。彼は何も知らなかった。戦争が起こっているということも、戦況が悪化しているということも。だから、きっと彼は戦争のない平和な世界で生きている人なんだろう。そんな世界本当に存在するのか、いや、しないだろう。きっと成は私が苦しい生活から逃げるために作りだした幻か何かなのだろう。私が望む世界を生きる、私が好きな人。こんなに都合のいいことはないよな。いままで他人とのかかわりを面倒くさがってきた私はどうして何度もわざわざ黄金山に生きわざわざ成と話していたのだろう。そもそもなぜ話しかけたりしたのだろう。すべて自分に都合のいいようにできてるよなあとしみじみと思う。

戦争が進んでいくにつれて私たちの授業は減っていった。いくら睡眠薬とも思える授業でもなくなると欲しくなるから不思議なものだ。戦争が終わったら絶対に毎回の授業を大切に受けようと肝に銘じる。そして減っていく授業の代わりに私たちの中学校の1年生と2年生は建物疎開をさせられた。今日も暑い中火が付いた時の延焼を防ぐために建物を人力で壊していく。

「せーの!」

汗で手が滑る。力をこめすぎて手は豆だらけだ。きつい。こんな状況で戦いに勝てるわけない。もう、やめたい。そんな暗澹とした気持ちは腹の中に抑えてただただ働く。明日も、明後日も、明々後日も、

今日も朝から建物疎開だ。すっきり晴れているなかでの作業はキツイ。東京のほうでは毎日のように空襲があるそう

だ。その点で、広島はまだ全然ましかもしれない。

ガンガンガン——

サイレンの音が鳴り響く。

頭上を見上げても飛行機は1機しかいないのに。

その瞬間、

——ピカーン!

私たちの頭の上で爆弾が炸裂した。辺りが光に覆われてまぶしい。その直後、熱風が私たちを包み込む。誰かの声が響く。

あつい。あつい!

いたい。いたい!

こわい。こわい!

体中が猛烈に痛む。頭の中に警告音が鳴り響く。何が何だかわからない。とにかく熱くて、痛くて、怖い。

建物は燃えてはいないものの原形をとどめず、ぐしゃぐしゃになっている。同級生たちの髪の毛は縮れ、衣服は焼けきり、全身やけどのため全身の皮膚が剥け、手足の先に垂れ下がっている。みんな黙々と郊外へ逃げようとする。自分もあんなふうになっているのだろうか。目の前で人が倒れていく。誰も助けられない。自分たちが逃げることで精いっぱいだから。おぞましい。地獄だ。怖い。

こわい。

まだ、死にたくないよ。

いたい。

もっと、生きたい。

私は前先生に言われた通り、黄金山に向かって走る。手の先にぶら下がった皮膚が邪魔でうまく前に進めない。自分の体が自分の身体じゃないみたいだ。こわいよ。お母さん、お父さん。助けて。誰か私を助けて。こわい。いたい。やっとの思いで黄金山にたどり着いた。



そういえば、由貴子は戦況がどうか言ってた。どういうことなんだろう。何かの試合か?

極端に細く小さい体。

微妙にかみ合わない会話。

最近全然見せなくなった顔。

達観しているような哀しい目。

「絶対会おうね」といっていきなりしたキス。

え、

頭の中にたった一つの可能性が浮かぶ。

いや、

そんなわけない。自分の妄想だ。

でも、

本当にそうだとしたら。

時刻は 8:15。鐘が鳴る。広島中が平和を願うこの時間。

まだ、間に合う！靴も履かずに一目散に走りだす。

間に合えええええ！



やっぱり、いるわけないよね。

ここまで来たけど、もう無理。ふら、っと体が前に傾く。とっさに目をつぶった。ら、来ると思っていたはずの衝撃が体に伝わらない。ついに死んだかと思って恐る恐る目を開く。そこには、成がいた。たった一人のどうしても会いたかった人がいた。



やっぱりそんなわけないよな。ぜいぜいしながら周りを見渡すと一つの人影が、ふらふらと歩いてくるのが見えた。人影に向かって走り出す。それががくっと倒れこんだ瞬間に受け止めることが出来た。間に合った。

由貴子？言おうとして言葉が出ない。あまりにも、人間とはいいいがたい、ひどいものだった。手が震える。怖い。恐ろしい生物を見ているかのようなだった。全身の皮膚が剥け表面が肌とは言えない色をしている。学校や家で幼いころから原爆について聞いてきたが、こんなにひどいものだとは思わなかった。

怖い。逃げ出したい。でも、金縛りのようにその場から体が動かない。

「... な、る、？」

自分の膝の上に横たわった生物がか細い声で話す。

「由貴子？由貴子なのか？」

聞き覚えのある声によって自然と声が出る。

「うん、そう。」

「なるくん。こわかったよお。いたいよお。まちには、わたしみたいなひとが、おおぜいいる。」

息を吸いながら途切れ途切れ話す。

「いっばい、ひとが、しんでる」

いやだ、死ぬな。だめだ。医者、そうだ、医者を呼んでこよう。

「ちょっと待ってろ、由貴子」

「だめ」

「だって、けっきょく、もうしぬ。」

どうして、どうしてそんなことを言うんだ。息が震える。どうして僕と同じ年のたった 13 の少女が自らの死を受け入れようとしなくてはならないんだ。

「だからここにいて。おねがい」

「わかった。わかったから、死ぬな。」

由貴子がかなしそうに笑ったのが分かる。

由貴子のであったばかりの顔が、笑った顔が、笑い声が、微笑みが、ひとつひとつ泡のように浮かんで消えていく。

「成くんの世界は、平和？」

由貴子が最期に言った言葉が頭の中で再生される。

僕たちは、今の世界を当たり前で過ごしている。由貴子たちの犠牲の上に平和があるとも知らずに。

ぼくは由貴子の問いに

「ああ、とっても平和。」

と答えた。でも、本当にそうっていいのだろうか。僕は今までのうのうと生きてきた。何にも、なんにも知らなかった。

平和が当たり前だと思っていた。そんな僕に平和なんて言葉を口にする権利はあるのだろうか。でも、この世界は由貴子が望んで、望んでも手に入れられなかった世界だ。僕は、なんて生き方をしてきたのだろうか。

目からぼろぼろと涙が零れる。

慟哭は静かな涙へと変わる。

僕らは、何も知らない。知ることはできない。

僕は知った。でも、みんなは知ることができない。

僕らは知らなくてはならない。覚えていなければならない。

僕は伝えなくてはならない。由貴子のために、犠牲者のために、平和のために。

戦争を、原爆を、ヒロシマを。そして、由貴子を。